

マシン油乳剤（トモノール S[®]）のすす病に及ぼす影響

○和氣坂成一・吉岡哲也※

（OAT アグリオ（株）・※福岡農林試八女）

チャ害虫チャトゲコナジラミは、2004年に京都において我が国で初めて確認され、2009年には九州でも分布を拡大し重要害虫となった。本種はチャを吸汁すること、幼虫が排出する甘露にすす病が発生し光合成を阻害するため、新芽の生育が阻害される。また、成虫発生が摘採時期と重なるため舞い上がった成虫が作業者に不快感を与えるなどの問題が生じている。

演者らは、2013年応用動物昆虫学会においてマシン油（トモノール S[®]）を乗用散布機で上、上下から散布することでチャトゲコナジラミを防除でき、また、同時に発生するカンザワハダニ、チャノナガサビダニの防除も可能であることを発表した。しかし、チャトゲコナジラミの被害については検討できなかった。ここでは、チャトゲコナジラミの排せつ物に起因するすす病に対するマシン油乳剤の効果を濃度別に明らかにした。また、他の薬剤を散布するとき使用する展着剤のすす病に対する影響について検討した。

マシン油の濃度別のすす病に対する影響

2013年3月19日福岡県星野村の茶園で肩掛け式散布機を使用してトモノール S（50、100、150、200倍（400L/10a）を散布した。散布13日後、27日後に、摘採面から1-2葉下の葉を樹幹面、裾部各20葉を1区あたり2箇所調査した。すす病の発生程度はすす病の面積で無（0%）、少（0~15%）、中（15~75%）、多（75~100%）の4段階で調査した。その結果、散布27日後のすす病の発生程度（対無処理比）は無処理78.8に対してそれぞれ50、100、150、200倍で、12.8（16%）、21.9（28%）、28.2（36%）、25.9（33%）となった。濃度が高いほどすす病が減少する傾向を示した。

各種展着剤のすす病に対する影響

2012年8月28日福岡県八女市黒木町の茶園で肩掛け式散布機を使用して展着剤（11剤）およびマシン油乳剤を400L/10a散布した。調査は8月28日（散布当日）、8月30日（散布2日後）、9月6日（散布9日後）、9月19日（散布16日後）、目視で、すす病のはがれ（剥離）程度を観察した。その結果、マシン油の剥離効果が最も高かった。

まとめ

チャトゲコナジラミは分布を確実に広げ、全国的に問題となっている。マシン油（トモノール S）はいち早く適用拡大し、使用されている。チャトゲコナジラミによるすす病も問題となり、害虫の密度を下げ、かつすす病の発生も軽減できるマシン油は大変有用である。マシン油乳剤の使用が問題となるのは、赤焼け病の発生を助長させることであるため、赤焼け病の発生が増加する晩秋季から冬季の散布を避ける必要がある。このため、本剤を10月以前、もしくは春季に使用することで、チャトゲコナラジミ、カンザワハダニ、サビダニを同時に防除し、すす病を減少させることで新芽生育に貢献すると考えられた。今後、すす病の発生程度とチャトゲコナジラミ密度の関係について検討が必要である。